

歴史的町並み観光地における観光情報提供システムの実態と課題

黒見敏丈^{*}, 坂元さや香^{**}

^{*}家政学部住居学科

^{**}2001年卒業生

(2001年9月13日受理)

Problems of Tourist Information System in Tourist Area with Historical Townscape

^{*}Department of Housing and Design, Faculty of Home Economics
Gifu Women's University, 80 Taromaru Gifu, Japan(〒501 - 2592)

^{**}Graduate in 2001

KUROMI Toshitake^{*} and SAKAMOTO Sayaka^{**}

(Received September 13, 2001)

1. はじめに

1970年代の「ディスカバー・ジャパン・キャンペーン」を契機として起こった小京都ブームによって、歴史的町並みを有する地方中小都市における観光活動は一般的な現象となり、各地で歴史的町並み観光によるまちおこしの事例が報告されるようになった。

歴史的町並み観光は、次の点で地元住民(ホスト)と訪問者(ゲスト)の双方にとって有益なものとなる可能性をもっている。ホストは観光活動を通じて観光資源の歴史・文化的な価値を再認識し、アイデンティティの確立や自地域への誇りを得ることが可能であり、一方ゲストも非日常的な空間を体験しホストと交流するなかで、町並みを基盤に繰り広げられてきた自分たちのものとは異なる生活景を想像し、また教養を高めることができる。

ただし、ホストとゲストが互いに共感し、双方にとって有益な観光活動の実現には、ホストが自地域の歴史・文化に精通し、またゲストに対し生活景を想像させる情報が十分に提供されることが前提となる。しかしながらほとんどの歴史的町並み観光地においてゲスト

トに提供されている観光情報は、有名な建造物や人物等の概要説明といった断片的・表面的なものにとどまり、歴史・文化の表象である歴史的町並み及びその構成要素の本質を理解するには情報不足であると言わざるを得ない。そのためにゲストは町並みの本質を理解できないまま観光地を通過してしまい、結果としてホストが期待するほど観光活動による効果が得られていないと考えられる。

そこで本研究では、岐阜県岩村町の重要伝統的建造物群保存地区を事例として、ホストがゲストに提供している歴史的町並み景観及びその構成要素に関する観光情報をその質に着目して調査・分析することで、歴史的町並み観光地における観光情報提供の問題点と望ましい観光情報提供に向けた課題を明らかにすることを目的とする。

2. 本研究における観光情報の概念定義と研究の方法

- (1) 本研究における観光情報の概念定義
観光情報とは「観光者が観光旅行を計画・準備し、実行するために必要なあらゆる情報」

1)であり、分類方法によって様々な捉えかたがなされている。

ゲストの立場では、観光情報は観光対象に固有の情報と旅行を計画・実行する上での手段(交通宿泊等)や条件に関する情報とに分けて考えることができる。情報の入手場所では、事前に入手することが可能な「発地情報」と、旅行中から到着後に入手できる「着地情報(現地情報)」に分類され、情報の内容で捉えた場合は、変更が少ない「静態情報」と定期・不定期に関わらず頻繁に更新される「動態情報」がある。(表 - 1)

表 1 観光情報の既往分類

分類キーワード	分類	情報内容
情報内容による分類	観光対象に固有の情報	文化財, 自然資源, 社寺, 名所, 旧跡等
	計画・実行段階での手段・条件としての情報	交通情報, 宿泊条件等
情報の入手場所による分類	発地情報	メディア: テレビ, ビデオ, ガイドブック, 新聞, 雑誌, FAX, インターネット等 / 内容: 現地の観光案内所にあるパンフレット, 花の開花予測等
	着地情報	メディア: ゲスト持参のガイドブック, 現地情報等 / 内容: 現地の観光案内所にあるパンフレット・地図等
情報の変更頻度による分類	静態情報	観光資源・施設の名称 所在地, 内容紹介, 交通情報等
	動態情報	交通情報, 空席, 空室情報, 観光地の近況等

文献 1), 2) を基に作成

これらの観光情報に関する既往分類は、情報を発信する側にとっては分かりやすい分類であるが、受け手側であるゲストにとって、観光対象の理解にどの程度価値のある情報であるかという点については考慮されていない。

そこで、本研究では「直接的情報」と「背景的情報」という用語を用い、観光情報の質的分類を試みた。

「直接的情報」とはまちや建造物がつくられた時期やその特徴を指し、現在の観光情報に示されるような評価や価値、関係する人物名などの表面的・ハード的な情報である。

一方、「背景的情報」は直接的情報の背景

を説明し理解を深めるための内面的・ソフト的な情報である。歴史的経緯や変遷過程、価値や特徴の成立要因、町並みや建造物と生活との関係、今後のまちの展望等がこれにあたる。

直接的情報と背景的情報は密接に関係し、どちらが不足しても観光資源の本質を理解することは難しいものである。

(2) 研究の方法

本研究は、以下の方法により進めた。

まず、岐阜県岩村町の重要伝統的建造物群保存地区(東西延長約1.3 km, 面積14.6 ha)を対象地域として(図 - 1), 当該地域内の歴史的町並み景観及びその主たる構成要素である建造物に関する観光情報を収集した(表 - 2)。なお、収集する観光情報は、ホストからゲストへの情報伝達関係を明確にするため、町内の行政機関及び住民(団体及び個人)により提供されている観光情報に限定した。

次に、収集した観光情報を対象としている観光資源の類型(町並み景観全体, 社寺, 文化財指定町家, その他の町家の4類型)及び提供メディア類型(表 - 2に示す大分類2類型, 小分類5類型)ごとに整理・分類し, 表 - 3に示す評価基準に基づいて、直接的情報と背景的情報がどの程度提供されているか評価した。



図 - 1 岐阜県岩村町の重要伝統的建造物群保存地区

表 - 2 提供メディアの種類

事前入手可能メディア	電子メディア	岩村町ホームページ 小冊子「いわむら」 パンフレット「岐阜 いわむら」 パンフレット「いわむら散策絵図」 小冊子「女城主の里 いわむら」
	ペーパーメディア	歴史資料館(民俗史料館を含む) まちなみふれあいの館(案内所) 解説用看板
現地限定メディア	施設メディア	まちかどギャラリー
	サインメディア	土佐屋 木村邸 浅見邸
	ヒューマンメディア	

最後に評価結果をふまえ、研究対象地域における観光情報提供の問題点を整理するとともに、望ましい観光情報提供に向けた課題を提起した。

なお、観光情報提供メディア類型は、まず入手場所によって事前入手可能メディアと現地限定メディアに大別し、さらに伝達媒体によって5種類に分類している。事前入手可能メディアは主として発地情報を扱い、特にホームページやメールといった電子メディアに代表される。ここでは岩村町の公式ホームページを対象とした。観光パンフレット等のペーパーメディアは現地で入手するほか、メールや電話による事前入手も可能であるため両項目にあてはめた。岩村町では観光施設内で配布する機会が多く、今回は入手しやすい4種類を選択することにした。

一方、着地情報を伝達する現地限定メディアはペーパーメディアに加え、建物内で情報を提供する施設メディア、路上や公園に設置されているサインメディア、特定の場所に常駐する現地住民によるヒューマンメディアに分類する。施設メディアは城下町地区における観光情報の発信地である「ふれあいの館」と、調査対象地域外ではあるが岩村町全体の情報を提供する歴史資料館を選択し、サインメディアは路上・公園にある解説用看板を対象とした。「まちかどギャラリー」は町家及び店舗の一部または空き家を改造し民具や生活道具等を展示した施設であるが、主に路上

から展示品を眺めるため本論ではサインメディアとして扱っている。ヒューマンメディアは案内システムがある町家を調査対象とした。

表 - 3 評価基準

		資源理解に充分な情報内容	記述はあるが資源理解には不足した情報内容	
町並み景観評価項目	町形成の歴史	形成時期	具体的な年代等	おおまかな時代区分
		現在までの変遷過程	過去の出来事と町の変遷との関係	変遷の事実
	景観構造	社会情勢との対応関係	まち形成・変化の理由と社会情勢との関係	社会情勢の内容
		景観の原型	景観構成要素の具体例	景観構成要素のおおまかな表記、地区ごとの分布
		現在の景観構造(原型との対比)	現在の町並み景観構成要素と原型との対比、現在そうなっている理由	現在の町並み景観構成要素(おおまかに)
		周辺地域を含めた景観構造	周辺地域との位置関係と地形的・社会経済的つながり	周辺地域との地理的な位置関係
	町並み景観保存運動	景観構造を理解できる眺望点	眺望点(場所)の明記、そこからの景観の特徴	眺望点の存在(その景観的特徴まではわからない)
		重伝建指定	指定の基準・内容、変化(保存の対象、規制等)	重伝建という用語及びその指定範囲
		町並み保存に対する住民・行政の取り組み	過去・現在の取り組みによる町並み景観や日常生活の変化	住民・行政が町並み保存に取り組んでいる事実
	社寺・文化財指定町家・その他の町家評価項目	時代背景	将来的な景観保存のビジョン	保存計画の概要、その計画による町並みの理想像
建築時期			具体的な年代等	おおまかな時代区分
当時の社会情勢			社会情勢とその建造物が造られた理由の関係	社会情勢の内容(建造物との関連はわかりづらい)
当時の町の様子			当時の生活と建造物の関係(必要性)	当時の町の説明(建造物との関係はわかりづらい)
外観・内観		歴代当主	人物紹介及び生きていた時代の様子	人物名等
		当主の人物像	人物の特徴または建造物(デザインや使い方)に及ぼした影響	経歴・業績
		ファサード(または内観)の特徴	建造物に固有の特徴(個々の要素のレベルまで)	町家(社寺)としては一般的な特徴(おおまかに)
生活・管理		特徴と生活・事業との関係	特徴と生活・事業との関係(特徴の形成理由)	特徴または生活・事業の様子(両者の関連はわかりづらい)
		ファサード(内観)の変遷と生活・事業変化との関係	変遷過程での住み方や事業の方法の変化が与えた影響	変遷の事実
		宗教的位置づけ(社寺)	特徴、普及した時代	宗派名等
生活・管理	ゆかりの人物	具体的なエピソード	人物名及び概要説明	
	住民の生活と社寺との関係	生活行事や精神性等との関係	祭等の歳時記	
	現在の維持管理の方法	管理者及び管理方法、維持・保存上の問題点や苦労等	管理者(団体)名	

注) 表中の網掛け部分は背景的情報に該当する項目であり、その他は直接的情報に該当する項目である。

3. 研究対象地域の概要

本研究の対象地域である伝統的建造物群保存地区が立地する岩村町は、岐阜県恵那郡の南部に位置し、東は中津川市、西は山岡町、南は上矢作町、北は恵那市に接する山間の情緒あふれる史跡観光の町である。主な観光資源は、日本三大山城と言われる岩村城の城址、重要伝統的建造物群保存地区選定の町並み、日本一の農村景観としてPRされている富田地区とそれらに関連したイベント等だが、岩村城址関係のものが最も多い。

対象地区は岩村城址の西方を流れる岩村川の左岸に位置し、川をはさんで旧武家屋敷群や農村地区（富田地区）と接している。東西に延びる本町通りを中心に、かつては800有余年の歴史をもつ3万石の城下町として東濃地方の政治・経済・文化の中心として栄えてきた。町並みの保存状態は良好で、平成10年に商家の町並みとして重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けている。

岩村町における町並み保存運動は町並み観光と並行して起こり、昭和60年に行われた岩村城創築八百年祭に伴って旧家及び社寺を一般公開したことに始まる。その年のゲストが前年（7万人）の約3倍の20万5千人に増加したことをきっかけにその後も旧家の開放、岩村城楽市まつりなどの町並み関連イベントを中心に観光事業を進めてきた。平成3年に木村邸、平成8年には復元された土佐屋がそれぞれ町文化財に指定され、また交流事業や商工会・まちづくり実行委員会の活動により、まちづくりや町並み保存に対する関心が高まっている。

4. 岩村町における観光情報提供の実態

(1) 全体的評価

今回の調査から岩村町で提供されている情

報量は予想以上に多く、伝達方法も文章・図版・模型等広範囲にわたっている。しかし情報の質に関しては、内容が一部の資源・項目に集中している。さらに各メディアにおける情報提供内容の類似から、伝達される総情報量に対してゲストが得られる実際の情報量はあまり多くない。

また、直接的情報と背景的情報の比較ではやはり後者の割合が少なく、背景的情報の圧倒的不足を問題として指摘できる。

(2) メディア別評価（表 - 4）

ペーパーメディア

情報の範囲は広く、直接的情報が多い。しかし紙面の都合上多くの情報を掲載することは不可能であり、評価基準に示した項目内容が掲載されていても、必ずしも充分な理解を助ける情報が提供されていない。また、町並み景観の構造や建造物の特徴等を補足説明する図版・写真のなかにはその意図が不明確なものもあり、資源理解に適切な図版の利用方法については検討が必要である。

電子メディア

直接的情報・背景の情報ともにペーパーメディアよりも多く、伝達量の制限が少ないため文章や図版・写真が豊富に提供されている。また必要に応じて動画等も使用でき、今後の利用が期待される。難点は、ひとつの観光資源を理解するために複数のページを開かなければ個別情報間の関連を把握しづらいことと、アクセスする側の環境が整わないと情報を入手できないことである。

施設メディア

場所が明確であることからゲストに認知されやすく、展示スペースも多い。しかし現状では町並み景観やその構成要素に関する情報を扱うことは少ない。

ふれあいの館では企画展示によって大量の

情報を伝達できる利点があるが、展示テーマ以外の情報が伝達されず、展示期間を過ぎると情報を入手できないといった欠点が挙げられる。逆に歴史資料館は常設展示が主で常に同じ情報を入手できる反面で変化に乏しく、そのため情報の偏りが改善されにくいという問題がある。

サインメディア

看板は設置場所に関する制約性が小さく、場所によっては情報と実物との対比が可能である。単独での情報は少ないが、設置箇所が多いため全体での情報量は多く、その範囲も広い。だがゲストが全ての看板を発見し、またそれに目を通すとは限らずかなり一方的な情報提供方法とも言わざるを得ない。さらに他のメディアと内容が重複することも多く、現時点での看板の存在意義はあまり高くない。

まちかどギャラリーは道具の展示にとどまり、文章による解説はわずか1～2箇所で行われる程度であった。ホスト・ゲストを問わず路上で気軽に覗くことができるメディアであるだけに、今後の活用方法が課題である。

ヒューマンメディア

背景的情報の伝達とその質においては他のメディアより優れている。岩村町のヒューマンメディアは特定の町家に限定されるため文化財指定町家の内部構成に情報が集中しているが、それ以外の項目もゲストからの質問によって情報の入手が可能である。

しかし人間が発する情報であるため同一資源の案内でもその情報は微妙に異なり、一度に全ての情報が伝達されることはまずないと考えられる。また、年号や人物の正式名、制度名等の暗記項目は伝達されにくく、生活の流れを把握するにはよいが正確な情報を必要とする場合はインタープリター⁽¹⁾の訓練や技術の程度に左右される。

表 - 4 メディア別評価

	扱う情報の範囲	全体的な情報量	情報の割合	
			直接的情報	背景的情報
事前入手可能 メディア	ペーパー	広い	少ない	少ない
	電子	非常に広い	非常に多い	多い
現地限定メディア	施設	施設による	多い	特定の対象に関する内容は多い
	サイン	単体では狭く、総合するとやや広い	単体では少なく、総合すると多い	多い
	ヒューマン	やや狭い(質問することやや広い)	多い	非常に多い

(3) 観光資源別評価 (表 - 5)

町並み景観

直接的情報は事前入手可能メディア、背景的情報は現地限定メディアで入手することが多い。主な情報提供内容はペーパーメディア、電子メディアによる景観構造に関する記述と、電子メディア、施設メディアでふれる町形成の歴史であるが、それ以外の情報は直接的情報・背景的情報ともに極端に少ない。

逆にあまり情報が提供されなかった項目としては眺望点の案内と将来的な景観保存のビジョンが挙げられる。眺望点は写真のコメントや絵地図から存在は確認できるものの具体的な位置や景観の特徴がわからず、将来の景観保存に関しては、土佐屋内部の展示パネルで少しふれる程度であった。

社寺

社寺に関する情報は一部のパンフレットに限定されており、そのパンフレットも建立時期以外に目立った記述はない。また、電子メディアでは歴史探訪やイベント情報など複数のコンテンツに情報が分散し、メディア別評価で述べたように全情報を閲覧することは困難である。

文化財指定町家

他の観光資源に比べて情報量が多く、ホストの関心の高さが伺える。特に歴代当主やゆ

かりの人物等の情報は直接的情報・背景的情報を問わず大量に伝達されている。しかしその内容は人物と業績の関係にとどまり、建造物やそこでの生活とは無関係に記されている場合が多い。

その他の町家

ホストが日常使用している町家の情報はほとんど公開されていない。一般の町家の説明は伝建地区の情報に混じってわずかに提供されるものと、特色ある土産品を製造・販売している町家や外観に特徴をもった町家など文化財ではないが何らかの特徴をもった特別な建物に限られている。

表 - 5 観光資源別評価

	代表的なメディア	全体的な情報量	分類ごとの特徴	
			直接的情報	背景的情報
町並み景観	ペーパーメディア 電子メディア	他の資源と比較して多い	景観構造に関する項目が目立つ(眺望点の案内は除く)	町形成に関する項目が目立つ
社寺	ペーパーメディア	少ない	特徴、ゆかりの人物名、宗教についてふられている	社会情勢と外観の変遷に関する内容がみられる程度
文化財町家	ペーパーメディア、電子メディア、特にヒューマンメディア	他の資源と比較して多い	人物と特徴に関する項目が特に多い	内観に関する項目はかなり充実している
その他町家	電子メディア	非常に少ない	特定の資源に限定される	特定の資源に限定される

5. 結論

(1) 観光情報提供の問題点

今回の調査によって、岩村町が提供する観光情報は表面的な特徴やゆかりの人物等の直接的情報を主として扱っており、一方で時代背景や建造物の特徴と生活との関係等の背景的情報が不足していることが明らかになった。

また、パンフレットや施設内の情報は町並みよりも岩村城址や農村景観に関する記述が目立ち、町並み景観及びその構成要素に関する

情報に限定した場合は文化財指定町家に関する情報が圧倒的に多く、その他町並み景観に関する情報がややあったものの、社寺や一般の町家に関する情報はほとんど提供されていない。特に、歴史的町並み景観を主たる観光資源としながら、全体の景観構造等に関する情報の不足は重大な問題として指摘できる。

一方メディア別に見ると、事前入手可能メディアは直接的情報を伝達し、現地限定メディアは背景的情報の伝達を行うといったメディアの使い分けの傾向が見られるが、各メディアが提供する内容には個性がみられず、メディアの特性を活かしきれていないように感じられた。しかし、ヒューマンメディアによる解説は、内容が文化財指定町家に限定されるものの背景的情報をよく伝達しており、資源を理解する上での情報提供方法として今後の可能性が期待できる。

(2) 望ましい観光情報提供に向けた課題

今後の情報提供の課題としては、まず全体的な背景的情報量の増加、町並み景観及びその構成要素、特に社寺や文化財指定のない町家に関する新たな情報の掘り起こし、各メディアの特性を活かした情報提供方法の提案、メディア間の連携による情報の相互補完、住民の伝達技術の向上とインタープリターの養成・普及等が考えられる。以下に課題を個別に詳述する。

組織的な情報収集・蓄積・整理

観光情報提供の課題として、まず背景的情報の収集と蓄積による情報提供の量と質の充実が挙げられる。そのために、収集した背景的情報を必要に応じて提供できるようデータベース化をすすめ、蓄積・整理作業を行うことが重要である。その際には背景的情報と直接的情報との関連に留意し、ゲストの理解を

深める効果的な提供方法を検討する必要がある。

情報の収集方法としては、住民同士が自地域についての知識・意見交換を行う住民参画型イベントなど、情報収集段階において住民が自地域への認識を再確認し、理解を深められる内容であることが望ましい。何故ならばそのような活動は単なる情報収集にとどまらず、ひいては観光地の演出設計の基盤を構築することにも繋がるからである。

岩村町ではまちづくり実行委員会によって既に情報の収集・整理が進められている。現在は実行委員による活動にとどまっているが、今後はさらに住民間のネットワークを形成し情報収集を展開することで、より詳細な情報収集・整理が可能になると思われる。

モデル観光ルートの設定とそれに合わせた 情報提供システムの構築

観光情報を提供するにあたり、あらかじめゲストを誘導するシステムが確立されていればゲストの行動に沿ったより的確な情報提供が可能となる。そのため、ゲストが観光地という空間を体験するために望ましい行程を想定した観光ルートを設定し、そのルートへゲストを誘導するための情報提供方法について情報の内容、質、使用するメディアなどの観点から検討することが必要である。

また、4(1)において各メディアによる情報提供内容の類似を指摘したが、今後は情報の種類や内容にふさわしいメディアによる観光情報の提供及びメディア間の相互補完を可能にするシステムの構築が必要である。現在、岩村町にはモデル観光ルートが複数設定されており、その観光ルートを活用しながら、観光情報を効果的に提供することにより、町並み景観を全体から部分まで理解することが可能になる。

施設メディアの充実・改善

岩村町における施設メディアでは、情報が岩村城址関係に集中し、または歴史的なエピソードが現在の町並み景観やその構成要素に対応していない等の問題点がある。

まず改善すべき点は、歴史資料館とふれあいの館の役割を明確にすることである。歴史資料館は岩村町の文化財など価値があるものを所蔵・保管する役割があるため大規模な内容の改変は難しいが、展示品や歴史的な情報を公開しつつ可能な範囲で現在の町並み景観やその構成要素との対応関係を示すことが望まれる。一方、ふれあいの館は住民間の観光情報収集ネットワークの中心として新たに収集した情報の公開を目的とするほか、歴史資料館と連携して特定の観光資源の特集を組む、観光パンフレットなどの情報を補完するといった機能も提案したい。また、後述のインタープリターの派遣所としても今後の利用が期待される。

まちかどギャラリーの活用

まちかどギャラリーは路上から気軽に情報を入手できるメディアであり、歴史的町並みをひとつの博物館と捉えた場合、まちかどギャラリーはゲストにとって最もわかりやすい形の情報提供手法である。そう考えるとまちかどギャラリーの活用はゲストが岩村町や伝建地区の町並みを体験する上で重要な位置を占めるものと考えられる。

活用法としては、現在のまちかどギャラリーがそうであるように住民が所有する昔の道具を展示するほか、その展示品に限らず町並み景観や付近の観光資源に関する情報、モデル観光ルートに対応した情報をも提供するサインメディアとしての役割も持たせることが考えられる。

インタープリターの養成

背景的情報をゲストに伝えるメディアとしてヒューマンメディアに勝るメディアはない

ことが今回の調査を通して実感された。しかし一方で、これほど安定性に欠けるメディアも他には存在しない。岩村町におけるインタープリテーションの現状をみると、対象となる観光資源は文化財指定町家に限定され、またインタープリターは教育委員会から派遣された職員か、対象となる町家の住人が担当しており、インタープリターとしての特別の訓練などは行われていない。

ヒューマンメディアは、欠点である安定性の問題が解消されれば、つまり伝達内容がある水準以上であれば、背景的情報を伝達するメディアとして今後大いに期待ができる。そのため、十分な情報知識と情報伝達技術を持つインタープリターを養成するシステムの構築が当面の課題と考えられる。

また、先述の住民参画型の情報収集方法などもインタープリター養成の重要なプロセスになり得るため、住民による情報収集を兼ねた訓練の方法なども有効だと思われる。

インタープリテーションは背景的情報の伝達に最も有用な方法であると思われるため、今後は以上の点を改善しつつ、文化財指定町家以外の観光資源や町並み景観に関する情報提供に対しても積極的に活用していくことが期待される。

モニタリングシステムの構築

新たなシステムを構築する場合に留意すべきことは、観光情報はホスト・ゲスト間で受け止めかたに差異が生ずるものだという点である。そこで、ゲストの反応をみるモニタリングシステムを考案しホスト側の一方的なシステムにならぬようシステムの監視を行わねばならない。それと同時に、モニタリングの結果をすぐにフィードバックし、観光情報システムの柔軟性を高めるような体制づくりも進めていくべきである。

岩村町における主なモニタリング方法とし

てはゲストへのアンケート調査が考えられ、それにより情報提供の実態を常に把握し、修正するように努める。また、何度も岩村町を訪れているゲストには特別にモニターとして長期にわたってシステムの修正・改善点を指摘してもらうよう依頼することもひとつの手段である。

6. おわりに

本研究で明らかになった観光情報提供上の問題点及び課題は一つの事例研究から導かれたものであるが、これらは多くの歴史的町並み観光地においても当てはまるものと考えられ、これだけ全国的に歴史的町並みを主要な観光資源とした地域活性化の取り組みが行われている現状において、ホストとゲストの双方にとって有益な観光活動が展開される上でも見逃すことのできない結果が得られたのではないかと考えられる。

今後の研究においては、実際に観光活動の主役となっているホストとゲストの双方による観光情報に対する現状評価を加味することで、より具体的な課題を抽出していく必要がある。

補注

(1) インタープリターとはもともとは自然公園等における「自然解説員」のことを指していたが、最近では観光地において自然資源に限らずに観光資源全般のことをゲストに対して分かりやすく解説する人のことを指して使うようになっている。

参考文献

- 1) 前田勇(1998):「現代観光学キーワード事典」学文社
- 2) 長谷政弘(1998):「観光振興論」税務経理協会